

1 地域との連携による学校づくりの必要性・重要性

(1) [世界防災閣僚会議 in 仙台 7月3～4日] のサイドイベント

- ・主催：外務省，内閣府，復興庁，国土交通省等
- ・趣旨（一部抜粋）
：防災に関する取組を紹介する場とすることで，多様な情報交換・意見交換を可能とし，防災に関する幅広い連携を促進する機会とする。（外務省国際協力局地球規模課題総括課）
- ・出展対象者
：中央省庁，地方自治体，国際機関，民間企業，NGO，大学 ㊟→東六地区連合町内会
- ・シンポジウム
- ・テーマと主張
：強靱なまちづくり
：しなやかさ（地域における日常的な関係性の構築）

※グローバルアンドローカル

(2) 避難所運営と教育活動の再開

- ・学校の位置及び学区の特徴
：JR 仙台駅から北に徒歩 7 分
：仙台東照宮の門前町として栄える。現在は，商店街，ビジネス街，住宅街からなる。
- ・避難者の特徴等
：帰宅困難者（旅行，出張，勤務，学生等）を中心に，最大時約 1, 800 人
- ・教育活動再開に向けての準備
：東日本大震災直後に避難所開設（小学校と東六コミュニティーセンター）
：避難所運営の引継（3/14 相談，3/15～3/17 共同運営，3/19～3/31 地域中心の運営）
：3/24 修了式（多目的ホールで学年部ごとに実施） 3/25（近隣の高校で実施）
：避難所運営での思いやり

※おもてなしの心

(3) 小学校期の特徴

- ・原風景と原体験
：成長モデル（地域の教育力）
：社会デビューとともに始まる社会性の育成
：憧れ形成は地域の人，もの，ことから
：よりよい行為や金言をシャワーのように浴びる時期
- ・心のふるさと
：人がまちをつくり まちが人を育む 学びの循環
：一人一人の心に故郷をつくる

- ・学校の求心力
 - ：時代を越えても変わらない価値のあるものを学び・繋ぐ文化（不易）
 - ：時代に敏感であるべき学校の取組・発信
 - 時代の変化とともに変えていく必要のあるもの（流行）

※生涯にわたる感性を形成する時期

2 今後、一層地域と連携して学校づくりを進めていく上での課題と展望

(1) 課題

- ・子育てにかかわる責任と理念の形成
 - ：役割分担!?
- ・協働型学校評価への参画（重点目標と指標づくり）
 - ：学校、家庭、地域の三者が同じ目標で取り組む重点目標と具体的取組
 - 「あいさつのよい子どもに育てる」「掃除、片付けの上手な子どもを育てる」
 - ：評価の乖離
- ・学校支援ボランティア（人数）の拡大
 - ：年間学習予定の早期設定とスーパーバイザーとの打合せ
- ・学校の情報発信
- ・職員の研修
 - ：授業レベルでの継続した取組，実践

(2) 展望

- ・学校支援地域本部事業と協働型学校評価の充実
 - ：保護者が講師やパネリストになる講演会等の実施
- ・学習を通じた地域の方々との学び合い
 - ：生活科や総合的な学習の時間の充実（研修の充実）
- ・「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」の推進
 - （文部科学省生涯学習政策局社会教育課）
 - ：花を育て，まちに飾る活動を通じた学び
- ・地域が培ってきたコミュニティへの積極的参加

※地域とともにある学校づくりの目的

- ：子どもの豊かな学びを創造し，地域の絆を繋ぐこと
- ：生き方，在り方を考えること
- ：人様に必要とされる生き方（自己有用感，自己存在感）
- ：成熟した地域＝豊かな人生

3 被災体験を踏まえた全国の学校へのメッセージなど

- ・去年今年貫く棒の如きもの（高浜虚子）
- ・物心両面に渡っての心温まる励ましに感謝
- ・震災から学ぶ教育，震災を語り継ぐ教育の展開
 - ：次世代に残す課題

※子どもたちが未来に夢や希望をもって引き継ぐ歴史

- ：歴史の証言者から歴史の創造者

【学びの循環】

本校の「故郷復興プロジェクト」の中で行っているあいさつ・ゴミ拾い運動は、地域の方々や保護者に案内を出し、活動と呼び掛けている。高学年児童は、ランドセルにメッセージを貼り、通学路のごみを拾って登校する。年間6枚になるメッセージは、卒業前に来賓や保護者の通る廊下に掲示する。この取組は、次のように広がる。

参加した来賓が、変化・成長する子どものメッセージを見取り、町内会だよりで紹介する。校長は、そのことを校長室だよりや地域の機関誌、会合等で紹介し、子どもたちに注がれている地域の温かいまなざしや支援に感謝する。学びは、学校と地域に信頼関係を築き、一人一人に充実感を残し、循環していく。

東六地区 第62回 社会を明るくする運動 総会資料に掲載の校長あいさつ

「社会を明るくする運動」に寄せて

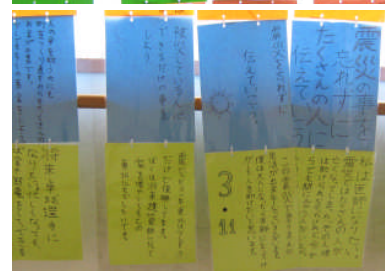
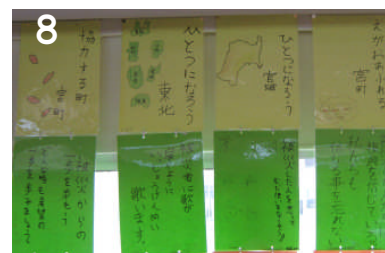
4月と5月、ある町内会から、おたよりと総会資料が届きました。そこには、町内会長さん方のまちをつくり、心をつなぐ理念がぎっしりと詰まっています。取組に頭が下がります。また、子どもたちの成長をその中心においていらっしゃることに深く感謝申し上げます。

学校では、今年度も、震災から学んだことをメッセージに込め、ランドセルにはって登校する活動を展開しています。震災と向き合い、復興を担う一人になるための取組です。卒業式前に一人一人のメッセージ（6枚）をつなげ、掲示しました。ある町内会長さんは、丹念にご覧になり、子どもたちの変化・成長を読み取って、「子どもたちは、将来の希望へと一歩ずつ歩み始めています。」と、紹介しています。

一方の町内会長さんは、単体や連合での各種行事への参加と呼び掛けています。子どもたちのふるさとは、生活しているこの地域や場所であり、子どもの頃の思い出であると説きます。そして、「私たちの手で将来の担い手を育てることが大切ではないか」と、呼び掛けに力を込めています。

「人がまちをつくり、まちが人を育む」3月に公表された仙台市の教育振興基本計画が目指す教育の姿です。人が育つこととまちが成熟することとは、同じ次元の幸せづくりだと考えています。

東六番丁小学校は、地域の方々の生き方に学び、地域の方々とともに歩む学校として、平成24年度も諸教育活動を展開してまいります。皆様の変わらぬご協力とご支援をお願いいたします。



- 1: 平成23年3月11日 東六番丁小学校体育館
- 2~5: 3月14日夜 避難所運営引継
- 6: 平成24年7月11日朝
故郷復興プロジェクト あいさつ運動
- 7: 平成23年9月13日
地域とともに防災を考える会
PTA会員が連合町内会長さん方に避難所運営について伺う
5年生が参加する（震災から学ぶ学習）
- 8: 平成24年3月中旬
廊下に掲示したメッセージ



校長室だより

No. 3 - 40

仙台市立東六番丁小学校 平成 24 年 3 月 21 日 児童数:401 名

学校・保護者・地域の三者協働による子育て(重点目標)

■約束を守る子どもにする ■掃除・片付けの上手な子どもにする



校木 [エドヒガザクラ]

一人一人の震災と復興への取組

湯ざめするまでお前と話そ夢に来よ 麻生 路郎

春の庭どの芽も夢を抱いている 吉原 辰寿

3月7日は、日本中が祈りの一日でした。東日本大震災から一年が経過し、各地で追悼式が行われました。午後2時46分、私は、去年と同じ場所(職員室)でその時を迎えました。報道されるテレビの前に立ち、慰霊祭に参加しながら黙祷を捧げました。翌日に聞いたことですが、たくさんの子どもたちが家で黙祷したそうです。

震災当日の夜10時15分頃、お湯でもどした備蓄米を握り、避難者にミカンほどの小さなおにぎりを提供することができました。子ども、高齢者、乳幼児のいるお母さんを中心に配りました。およそ1,800人いた避難者の3分の1ほどの数だったと思います。しかし、避難者から不満の声は上がりませんでした。辛い状況にあってなお相手への思いやりの心を失わず、体を寄せ合って寒さをしのぎ、恐怖と不安に耐えていたあの日。本校の避難所でも、日本人の優れた道徳性や社会規範が見られました。このことを語り継ぐため、12日をおにぎりだけのお弁当の日としていました。(1学級のみ食数の調整によって給食)。子どもたちに、おにぎり弁当の趣旨を伝え、今なお普通の生活ができていない人々の生活に思いを寄せ、食事を作ってくれる人に感謝することを話しました。

校内放送を聞いた来校者が、おにぎり弁当の取組に心打たれたと、目に涙を浮かべて話したそうです。15日には、避難所運営のボランティアをした高校の女子生徒二人が来校しました。大学に進学が決まり、仙台を離れる前に、思い出の場所を見学に来たのだと言います。当時のことを語る目には涙があふれていました。改めて、日本人にとって、それぞれの震災だったことを感じます。

来年からの3月7日は、鎮魂の日とともに復興の目標となる日でもあります。一人一人がその日を目指し、復興に取り組むことが求められています。女子生徒二人に、お祝いと励ましの言葉に加え、たくさんのことを語り伝えることも震災体験者の務めであると話しました。



おにぎりをほおぼる子ども

よりよい成長を支える背割れ

3月7日、6年生が卒業しました。今年の6年生は、とりわけ下学年から慕われました。3月7日に行われた児童会行事の「6年生を送る会」で、贈る言葉を話す1年生が、出番の前に泣き始めました。優しく、寄り添った6年生の姿が想像できます。入学直後の紙芝居や読み聞かせ、手を取って入ったプールでの学習、スポーツテストの補助等々よい思い出をたくさん作ってくれました。

6年生は、修学旅行先の花巻で林業体験をしています。里山に入り、植林されている杉の枝払いをしました。里山とはいえ、子どもたちにとっては急斜面です。自由の利かない場所での作業は、森を守るための手入れの大変さを想像するには十分な難所でした。森林の働きの一つに、環境保全や治水があることを学びました。環境保全や治水の仕事は、すぐに結果が出るものではありません。花巻市森林組合の皆さんは、数年、数十年後に役立つ仕事に誇りをもって肌で感じ取ることができました。

チェーンソーアートの見学もしました。一本の丸太から、チェーンソーだけで作品を仕上げるのです。変化する丸太に目は釘付けでした。輪郭が現れてくるにつれて大きくなる驚きの声とともに、やがて、丸太はふくろうに変わりました。見事な腕前です。しかし、きれいに仕上げたふくろうの背中に、惜しげもなくチェーンソーで深い傷を入れるのです。これは、数年後の乾燥から作品を守るための対策だそうです。「背割れ」と教わりました。

翻って、私たち人間の数年後・数十年後を担保するものはあるでしょうか。背割れに替わるものとして、皆さんは何を考えますか。

誠実さや勤勉さ、心身の健康、確かな学力などもその一つだと思います。特に、成長期の子どもに求められることは豊かな体験です。総合的な学習の時間や故郷復興プロジェクトで出会った人々の考え方や取組に学んだように、一所懸命な人に出会い、豊かな体験を沢山することです。自分をつくることの第一歩は、目の前の大人から学ぶことです。

体験を積み重ねていくことは、経験したことのない新たな課題を解決する力になります。社会に役立つ力になっていきます。よりよい体験は、自分を裏切らず、自身の品性を高め、人様に喜ばれる人間としての成長を支えてくれます。復旧・復興の道のりと一緒に成長し、復興を支えるこれからの時代に生きる子どもたちには、よりよい出会いの中で、豊かな社会体験や自然体験を沢山してほしいと願っています。



背割れ

校長室だよりをお読みいただきありがとうございました。今年度は、震災に学び、震災を乗り越える教育活動を展開し、校長室だよりでも震災に関する話題を取り上げてきました。学校の取組を励ます声をお寄せいただきましたことに心から感謝申し上げます。

地域の方から、校長室だよりは、A4判サイズがよいとの声をいただきました。B4判より文字が小さくなります。今月は、保護者用と同じ判にしてみました。(渡部)。



校長室だより

No. 3-28

仙台市立東六番丁小学校 平成 23 年 4 月 11 日 児童数:400 名

学校・保護者・地域の三者協働による子育て(重点目標)

■約束を守る子どもにする ■掃除・片付けの上手な子どもにする



校木「エドヒガナザクラ」

震災を乗り越えて がんばろう！仙台

あゝといひて 吾を生みしか 大寒に 矢島 渚男

3月11日、午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、東日本に甚大な被害を及ぼしています。その影響は、日本を超え世界中に及んでいます。津波に破壊された惨状を目撃し、絶句する人もいます。その破壊力を「戦争以上だ」と表現する人もいます。一瞬にして、根こそぎ家をなぎ倒し、まちをのみ込み、命を奪った津波の破壊力を見せつけられ、想像を超える自然のエネルギーに驚きを禁じ得ません。

被災された方々に掛けるふさわしい言葉が見つかりません。心からお見舞いを申し上げます。また、犠牲になられた方々に心から哀悼の意を表します。

大打撃を受けた仙台に住む人間として、仙台市立学校に奉職する一人として、この震災を語り継がなければならないと考えています。惨状に目を背けず、希望に向かって歩むたくましさや力強さなど、極限の状態の中にあって、なお人間の輝きや美しさを発している人々の生き方を伝えていく責務があると考えています。

この子どもたちが大人になったとき、被災体験を生かし、困難や不測の事態にも対応できる能力を身に付けて欲しいと願っています。「被害がなくてよかった」と、我が身の状況のみで物事の価値を判断するのではなく、様々な状況や人々の心情をくみ、特に、困難な状況にある人々の心を考え、寄り添い、手助けできる大人になってほしいと願っています。人は体験を重ね成長していきますが、この震災体験を受け止め、そして、意味付け、仙台の復興、日本の復興を体験した大人として、問題解決能力に優れた人間、思いやりのある人間に育つように学習プログラムを創造していきたいと考えています。

子どもの笑顔は希望の象徴です。子どもの元気は大人の勇気です。子どもたちが笑顔で活躍することを通して、がんばる宮町、仙台の復興、日本の復興に貢献する教育が求められていることを肝に銘じ、教育活動に取り組む一年にしたいと考えています。共に手を携え、保護者、地域の皆様とこの難局を乗り越え、日本の宝、将来の宝である子どもたちを育てて参りたいと思います。保護者の皆様、地域のご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。



「一体感」をつかった避難所運営

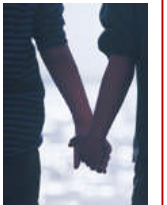
3月11日、午後4時前、余震が頻発する中、避難者がどっと押し寄せて来ました。保護者への引き渡しの最中で、子どもたちの多くは校庭に残っていました(最終引き渡し時刻は21:05)。仙台駅に最も近い避難所ということもあり、帰宅途中・旅行中の避難者で体育館はすぐにあふれました。被害の大きい3階を除き、校舎の1・2階も開放することにしました。その夜は、約1,800人が本校で一晩を明かしました。近隣住民の避難者が多くいた東六コミュニティセンターには360人、近くの常盤木学園高等学校には600人の避難者がいました。

避難所は3月31日に閉所されましたが、この間、勇気付けられる様々な出会いや心温まる協力がありました。窮状から生まれる人々の協力や助け合いの精神など、元氣や勇気をもたらした27日間でもありました。

何よりも、海老一朗連合町内会長さんを中心とした東六地区災害対策実行委員会の活躍には敬服いたします。会長さんを支える藤本保之避難所対策部長さんと今泉清二地域対策部長さんの適切な指示のもと、各町内会長さんや関係機関の皆様が一致協力して避難者の生活を支援してくださいました。また、3月15日~17日のおよそ3日間で、学校で立ち上げた支援体制を引き継いでくださいました。お陰様で、職員には教育活動を再開するための時間ができました。避難所対応は管理職等数人の職員で行うことができました。多くの人員と労力を投入して下さった実行委員会に感謝申し上げます。学校と地域、地域住民相互に一段と強い絆で結ばれたことを実感しています。

避難所が開設された11日の夕方からは、避難者でもある宮城教育大学の学生たちが、ボランティアとして大活躍しました。避難所運営には、教育活動に通じる実態把握や創造性等が求められたので、避難所での経験はきっと教職でも生きて働く力となるに違いありません。また、翌日には部屋ごとに避難所運営に協力してくれる世話人が出たこと、地域の方々や宮城第一高等学校の生徒たちがボランティアに加わったこと、地域住民の炊き出し、商店からの差し入れがあったことなども避難者のみならず運営する人を勇気付けました。「ありがたい」と感謝してくれる避難者の言葉、自宅に戻られた方々からの感謝のメールなどにも元氣付けられました。

様々なストレスを感じる厳しい状況にありながら、規律ある避難所運営ができたのは、一人一人に、思いやりの心や互助の精神があるからだと考えています。「日本は一つ」これは、テレビから流れてくる応援メッセージですが、目の前で展開した一体感でもありました。



被災者に思いを寄せる

4月18日から簡易給食が始まります。詳細は教育委員会からのお知らせをご覧ください。当面の間、パンと牛乳だけの給食になります。本校では、22日までの5日間、おかずの持ち寄りを控えさせていただきます。被災者の立場を理解する疑似体験にもなります。各ご家庭での朝晩の規則正しい生活・食事についてご理解・ご協力をお願いいたします。





校長室だより No. 4 - 44

仙台市立東六番丁小学校 平成 24 年 6 月 25 日 児童数:416 名

学校・保護者・地域の三者協働による子育て(重点目標)

■約束を守る子どもに育てる

■掃除・片付けの上手な子どもに育てる



森林の手入れに思う

万緑の中や吾子の歯生え初むる 中村 草田男

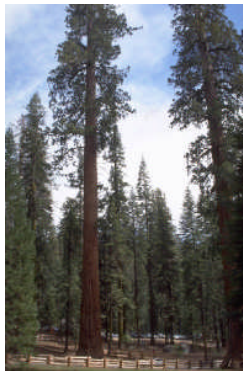
6月12, 13の両日, 6年生の修学旅行でした。今年も花巻市の観光協会と森林組合の皆様のご協力の下, 枝打ちと間伐を体験できました。二日目の林業体験から述べます。

朝の対面式で, 花巻の皆さんは, 次のようなことを話されました。「目的に合う木材に育てるためには, 30年, 50年を要する。もっとよい木材に育てるには, 80年もの歳月が必要である。世話した人がその瞬間を見られないこともある。」林業に携わる人々の息の長い仕事について知ることから活動が始まりました。

里山に入り, 枝打ちや間伐では, 足元の不安定な斜面に立ち, 使い慣れない鋸を引きました。図工の時間鋸を使ったことはあるとは言え, 直径12~15センチメートルの生木を引いて切るには時間がかかりました。害虫から樹木を守り, 森に光を入れるための作業であることを確認しながらの活動でした。2時間の成果は, 子どもたちの表情に表れました。集合場所に戻る子どもたちを見た添乗員さんの言葉です。「子どもの顔, 生き生きしていますよね。」

その後, グループごとにインストラクターの方々とお弁当を食べました。大人の質問に答える子どもたちの声です。「天文学者になりたい」「私の家は4人家族で・・・」他者に将来の夢や家族への思いを話すことは, そのことを強く意識したり考えを鮮明にしたりするものです。林業に従事する人々の思いや情熱を感じるとともに, 自分自身の今やこれからを考える貴重な時間であったに違いありません。森林には様々な働きがあります。きれいな水や空気をつくりだすこと, 生物の生息する環境や木材の提供など, 私たちの生活を潤すたくさんの働きがあります。その仕事への矜持を聞き, 自分のこれからの生活や大人の生活を思い描くよい機会でした。

30年, 50年先につながる仕事は, 祖父母の孫に注ぐ愛情, そして, 将来幸あれと願う我が子への教育や愛情と重なって見えます。人は, 体験を昇華し, 意味のある経験を重ねていきます。そこから得られることが, 知見や知恵です。洗練された職人によって手入れされた杉の幹は太く, まっすぐに天にそびえています。手の入らない山の貧弱な杉を横目に, よき環境で育つ子どものよき成長と先々の幸福を願いました。



教科等の学習を通して地域とともに歩む

社会を明るくする運動推進委員会に参加しました。各町内会の会長さん, 民生児童委員や保護司の皆さん, PTA会長さんなど, 日頃から地域のことを考えてくださっているの方々による会合です。子どもたちの地域での生活の様子についても紹介がありました。改めて, たくさんの方々に見守られて子どもたちが育っていることを実感する時間でもありました。

人は, 無意識の中に, 出会った人や刺激を受けた人物などをモデルにして成長すると言われています。「教育は感化なり」身近な人の考え方や所作が刷り込まれていくことを絶妙に表現している言葉です。相田みつをさんの言葉を引けば, 「育てたように子は育つ」と言ってもよいでしょうか。

2年生と3年生が, 地域について知り, 地域の方々の地域を守ろうとする取組について学んでいます。2年生は, 芽の出た朝顔の鉢を店頭にも置かせてもらっています。花の成長を通してあいさつや会話が飛び交うことを期待しています。3年生は, 全員の子どもたちが目にするのでできない地域の取組を可視化することで, 守られている自分たちにできる取組を考えようとしています。空堀町内会の海老会長さんなどにご協力をいただいています。

「人がまちをつくり まちが人を育む」これは, 仙台市教育委員会の今後10年間の教育方針を貫く精神です。震災後, この地域が称賛された地域の絆は, 後世まで伝えたい地域の財産です。様々な教育活動を通して, 隣人や他者への思いやりを学ばせていきたいと考えています。復興の道りは長く続きます。この子どもたちが引き継がなければならないほどの大きなダメージです。創造ある復興の担い手として, そして, 不測の事態に対応できる大人として成長するためにも, 地域力を借りながら, 地域とともに歩む教育活動の推進にさらに力を入れていきます。今後ともご理解とご協力をお願いいたします。



震災に学ぶ

震災後, 状況設定を様々に変えながら避難訓練を行っています。3, 77直後の児童の引き渡しや避難所開設・運営を経験し, 訓練や備えで対応できなかった点があったからです。引き渡しカードの簡略化, 放送設備を使用しない指示, 避難経路確認後の避難誘導など, 様々な状況を設定しながら行っています。

今後検討しなければならないことの一つに, 子どもの並ぶ順番があります。日常の整理は, 身長順です。引き渡しカードは名簿順です。これを統一することで, 引き渡しに時間をかけないようにすることを考えています。なぜならば, 地震直後, 商業施設からの避難者と帰宅困難者などが押し寄せました。正確な人数や状況の把握, 放送設備が使用できない中での的確な指示などの観点から考察すると, 初期の段階で避難状況を的確に把握するための誘導が求められます。そのため, 避難所開設に伴う人員が必要になります。

都市型の避難所においては, 地域住民と帰宅困難者を受け入れる施設としての機能や体制が求められていると考えます。それを特定避難所と呼び, 訓練する必要を感じています。

